

# 英語による被爆証言の聞き手の追跡調査 ——米国人学生の理解と伝達の特徴の分析——

大 場 美 和 子

## 1. 研究の目的

広島では、原爆の悲惨な実態を伝えるための平和学習活動がさかに行われ、広島県内の大学では、夏季に国外の提携大学などの学生を受け入れ、短期の平和学習プログラムが実施されることが多い。この平和学習プログラムには期間も内容も様々な種類があるが、調査者の勤務先では、被爆者自身による被爆証言が組み込まれることが多い。この被爆証言は、原爆を体験していない聞き手に対し、証言者が直接語りかけ、原爆の悲劇を実感させる重要な意味を持つ。そして、証言者は、原爆の悲劇を二度と繰り返さないためにも、直接的な聞き手を通して、証言の内容が広く世界に伝えられることを望むと述べて証言を締めくくることが多い。

この被爆証言の聞き手が外国人の場合、証言には通訳が入ったり、翻訳が提示されたり、被爆者自身が英語で証言したりする。調査者の勤務先で行われる米国人学生対象の平和学習プログラムでは、証言者自身が英語で証言を行い、米国人学生は証言者から、直接、証言を聴講する。この英語を媒介語にした被爆証言を、米国人学生はどのように理解し、帰国後、被爆証言のどの内容をどのように伝えているのか、聞き手を実際に追跡した調査はこれまで殆ど行われてきていない。米国人学生の被爆証言に対する理解と伝達の実態を探ることは、今後の平和学習プログラムのありかたを検討することにつながられる。

そこで、本研究では、広島で被爆証言を聴講した米国人学生に対する追跡調査を行い、被爆証言の何をどのように伝えているのかという被爆証言の伝達の特徴を探ることを目的とする。被爆証言の理解と伝達の実態をデータから具体的に明らかにすることは、貴重な被爆証言を誤解なく後世に伝えていく方法を考察するための基礎的な資料となると考える。

## 2. 先 行 研 究

米国人学生が広島で聴講した英語による被爆証言を帰国後に他者に話すという一連の言語行動は、被爆証言というナラティブの再話（retelling）であり、その再話自体もナラティブであると考えられる。以下、ナラティブと再話について述べる。

まず、日常生活の雑談で生起するナラティブを分析対象とした研究では、聞き手の役割の重要性が指摘され、ナラティブは聞き手との共同構築によってなされるとされている（Ochs et al 1992, 西川 2005）。また、これらの研究では、ナラティブは単に過去の体験などをそのまま話すのではなく、その話す行為を行う時に参加者の相互行為によってナラティブを再構成していると指摘している。米国人学生が被爆証言を友人に話すという言語行動も、被爆証言をそのまま伝達するのではなく、聞き手と協力して被爆証言の伝達というナラティブを再構成するものと考えられる。

次に、再話の研究では、特に言語教育の分野で、言語習得や読解能力を分析する手段として再話を実験的に行う傾向にある。例えば、絵、ビデオ、読解教材などを学習者に刺激として与え、その内容を学習者が再生するという方法である。これにより、オリジナルの刺激と再話の情報の一致率の分析（烏 2010）、再話の言語的特徴の分析（渡辺 2003, 2007）、読解の実態の分析（渡辺 1998, 白石 1999）などが行われ、その

結果を教育現場へ応用することが考察されている。

以上の研究では、言語習得や読解の実態を測ることを目的としており、オリジナルの刺激と再話の内容は統制されている。被爆証言の伝達という言語行動についても、内容の統制を行って実験的な手法で綿密に理解と伝達の実態を探る手法と、米国人学生の日常生活に近づけて内容を統制せずに伝達の特徴を探る手法が考えられる。本研究では、以下の2つの理由から、後者の手法で、内容を統制せずに、聴講した被爆証言を、日常生活において比較的自由に他者に話すという言語行動の特徴を明らかにすることを目的とする。1つは、殆どの被爆証言で、証言者は証言の聞き手に対し、帰国後に家族や友人に聴講した証言を伝えることを依頼して証言を終了しているためである。できるだけ、証言者が想定している伝達の会話を収録し、その特徴を探りたいと考えた。もう1つは、実際に、米国人学生も被爆証言の聴講を含め、広島での平和学習活動について、帰国後に家族や友人に自由に話すことが予測されたためである。実際、これまで平和学習活動に参加した学生から帰国後に広島の経験について話したという報告があり、勉強会まで発展したという報告もあった。もちろん、友人や家族との自由会話や勉強会などでは、話す目的が異なり、話す内容や話し方も大きく異なると考えられる。本研究では、まず、友人に自由に平和学習プログラムについて話してもらい、その中で出現する被爆証言に関する話題とその時の話し方の特徴に着目する。

ただし、伝達場面の会話の内容を統制しない場合、元の被爆証言の言及内容の全てが出現するとは限らず、また、被爆証言とは異なる内容に話題が展開することが予測される。聴講した被爆証言を帰国後にどのように他者に伝えるかは自由であり、本研究では、米国人学生が被爆証言の中のどの話題を選択し、その話題についてどのように話しているのか、その実態を探りたいと考える。その伝え方の特徴を探ったうえで、被爆証言を含む平和学習活動のプログラムの計画に反映したいと考え

る。

以上をふまえ、本研究では、被爆証言を聴講した米国人学生に対し、まず、アンケート調査によって証言の理解と帰国後の伝達の有無を確認し、さらに、内容には統制を加えずに日常生活に近い状態で伝達場面の会話を収集し、伝達の会話の実態を探るものとする。

### 3. 調 査 の 概 要

本研究では、2011年7月に広島における平和学習プログラムに参加し、英語による被爆証言を証言者から直接聴講した米国人学生を対象に、2つの追跡調査を行った。1つは追跡アンケート調査（2011年12月）、もう1つは伝達場面の会話調査（2012年2月）である。米国人学生が聴講した被爆証言、2つの追跡調査とも、使用言語は全て英語である。以下、「被爆証言」、「アンケート調査」、「伝達場面の会話調査」の順番に説明する。

まず、被爆証言は、2011年7月に被爆者自身が英語で米国人学生に対して行った1時間程度の被爆証言の録音・録画である。外国人の聞き手のために英語で証言の原稿があらかじめ準備されており、証言は基本的にその原稿を読みつつ行われた。証言後の質疑応答は通訳を介して行われた。配布資料はなかったが、証言中、証言内容に関連する絵や写真が全体に提示されることがあった。

次に、アンケート調査は、被爆証言の聞き手に対し、2011年12月にメールを介してアンケート調査用紙を送付して行い、10名の回答を得た。調査は、4つの質問項目に関して計18の質問を自由記述形式で行った。具体的には、「①平和学習（参加日程、事前学習）」、「②証言者（氏名、年齢）」、「③証言内容（投下時の年齢や学校などの基本情報、投下時の状況、当日の体験、負傷状況、目撃情報、戦後の後遺症、戦後の生活、つらかった経験、証言が語られない理由、証言開始のきっかけ、

証言の主張点、その他、など)」、「④帰国後の証言の伝達の有無、平和学習活動に関する要望」である。③証言内容に関する質問は、前述の被爆証言をもとに、証言の内容の事実関係が確認できるように作成した。

最後に、伝達場面の会話調査とは、被爆証言の直接の聞き手の米国人学生が、帰国後に友人に対して、被爆証言を含む広島での平和学習プログラムについて自由に話して伝達する場面の会話の録音・録画である(2012年2月、15分～30分程度)。伝達の会話の収録時、広島から帰国してこれまで家族や友人に話した時と同じように話し、話題は被爆証言だけにこだわらずに自由に話してもいいと説明した。よって、会話の終了時間も調査者からは設定せずに参加者に任せた。本研究では、共通の証言を聴講した6名の会話を分析対象とする。なお、アンケート調査(10名)と共通する学生は4名である。

図1は、被爆証言、ならびに、追跡調査の伝達場面の会話の参加者の関係を提示している。被爆証言の直接的な聞き手(L)であり、伝達場面の会話で被爆証言を伝える参加者を「伝え手(T)」, その伝達の会話で間接的に被爆証言を聞く友人を「受け手(R)」とする。

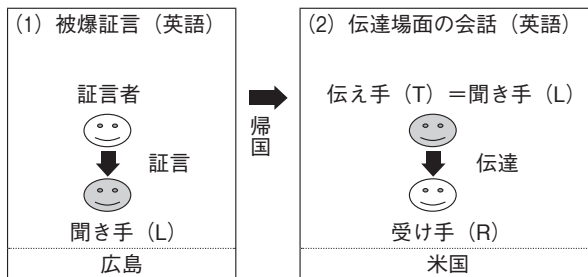


図1 被爆証言と伝達の会話の参加者の関係

表1は、伝達の会話のデータの概要で、会話の時間と受け手の情報を提示している。調査の依頼時、伝え手(T)には、受け手(R)となる友人を連れてきてくれるよう依頼しただけであったが、参加者の人

数（T1のみRが3人）やRの日本や原爆に関する情報量には違いがみられた。例えば、T1の場合、3人のRは全員日本語ならびに平和学習に関する授業を受講中であり（日本語学習中、関連授業受講中）、このうち2人はT1と同じ平和学習に参加する予定である（平和学習参加予定）。また、被爆証言についても3人は関連授業で見たり読んだりしたことがあり（文字・映像）、Raは長崎で別の証言を直接聞いたことがあり（直接）、そのことをRcはRaから聞いている（伝聞）。一方、T2、T3、T4のRは、日本語や平和学習に関する授業の受講経験はなかった。これらのRの情報量の違いが、伝達の会話にも影響するものと予測される。

表1 伝達の会話のデータの概要

伝え手	時間	受け手の情報量
T1	11:11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語学習中（Ra, Rb, Rc）</li> <li>・関連授業受講中（Ra, Rb, Rc）</li> <li>・平和学習参加予定（Ra, Rc）</li> <li>・被爆証言（文字・映像：Ra, Rb, Rc, 直接：Ra, 伝聞：Rc）</li> </ul>
T2	9:23	—
T3	23:03	—
T4	12:03	—
T5	29:28	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語学習中</li> <li>・歴史教育を含む沖縄での語学研修参加</li> </ul>
T6	34:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語学習中</li> <li>・平和学習参加予定</li> <li>・空襲の証言（伝聞）</li> </ul>

#### 4. 分 析

まず、アンケート調査の回答から、米国人学生が証言内容をどのように理解しているのか、その傾向を確認する。次に、伝達場面の会話の分析から、証言内容のどの部分をどのように友人に語っているのか、その

特徴を探る。

#### 4.1. アンケート調査による理解の確認

本節では、アンケート調査の4つの質問項目に対する回答の全体的な傾向を述べる。まず、「①平和学習」の質問により、2011年7月の被爆証言を聴講した学生を特定した。回答した全ての学生が、事前学習の質問に対し、平和学習プログラムの前に何らかの情報を調べていたとあり、学習意欲の高い学生であったと考えられる。また、アンケートからの情報ではないが、本調査で対象とする平和学習の参加費用は、大学からの補助もあるものの、基本的には学生の自己負担である点でも、平和学習プログラムに対する強い関心がうかがわれる。

次に、「②証言者」に関する回答では、アンケート調査がすでに被爆証言の聴講から5か月たったこともあり、証言者の名前や年齢などの基本情報を回答した学生はいなかった。

さらに、「③証言内容」に関する回答では、被爆当日の体験から戦後の体験、証言の主張に至るまで、ほぼ証言の内容通りに簡潔に答えられており、証言内容は概ね理解されていると考えられた。ただし、事実関係の詳細には多少のずれが観察された。例えば、原爆投下直前の証言者に関する質問では、証言者が外にいたことに言及した回答であっても、その外にいた理由として、建物疎開に言及した回答は少なく、登校中や遊んでいたなど証言内容とは一部異なる回答もあった。

最後に、「④帰国後の証言の伝達の有無」に関する回答では、全員が家族や友人に被爆証言も含めて平和学習について語っていたことが明らかとなった。回答では、特に特別な発表会のような場面で話すような記述はなく、本研究の伝達場面の会話に近い話し方であったと予測される。

以上、①～④の回答より、米国人学生は、被爆証言や証言者に関して、詳細部分は忘れてしまった情報はあったとしても、証言内容につい

ては概ね理解していたことが、特に③からうかがわれた。さらに、アンケートと次節の伝達の会話の両調査で同一の学生4名の回答を見ると、同一の内容であっても言及のしかたに違いが見られた。例えば、アンケート調査の戦後の生活に関する質問には「Everyone treated her differently」と簡潔な回答であるのに対し、伝達の会話では、例(1)のように、自らの主観的な情報と伴に詳細に語る(70-71, 73-74)傾向が観察された。そこで、米国人学生が、伝達場面の会話において、被爆証言の何について、どのように言及しているのかを検討することとした。

例(1) 戦後の生活 (T1)

70	T	So yeah like it was like an entire life of just being shunned by everyone.
71	T	And its kinda that's really sad especially if it's her own people and her own society.
72	Rc	Yeah.
73	T	Like its like it should have they should be accepting and try and comfort her for what she went through.
74	T	But not only did she have to got through that experience but it also like haunted her for the rest of her life.
75	Rc	Yeah.

4.2. 伝達場面の会話における言及内容の分析

伝達の会話の分析では、6つの会話データ(表1)における参加者の全発話を文字化し、文単位で区切った。そして、各発話文における言及内容を記述し、その言及内容のまとまりから、12の話題のカテゴリーに帰納的に分類(Glaser and Strauss 1967)した。表2は、各話題カテゴリーの説明と例文である。例文の括弧内の記述は、会話に参加する伝え手(T1~T6)と例の発話文の番号である。



表2 12の話題のカテゴリーの一覧

12の話題のカテゴリー	カテゴリーの内容と例文（伝え手，発話文の番号）
1. 証言者の体験情報（当日）	爆撃機の日撃，自身の火傷，川での死傷者の目撃，友人との行動など，原爆投下当日，証言者自身が体験したことにに関する言及である。 She saw she was outside playing with her friends. (T 1, 17T)
2. 証言者の体験情報（後日）	戦後の生活，差別の体験など，主に戦後，証言者自身が体験したことにに関する言及である。 But she's had a lot of surgeries from what I understand. (T 3, 140T)
3. 当日情報	負傷者の描写など，原爆投下当日，証言者以外の人が体験したことにに関する言及である。 But like, if they drank the water it would boil in their insides and it would kill them faster. (T 1, 30T)
4. 後日情報	家族や友人の消息など，主に戦後，証言者以外の人が体験したことにに関する言及である。 Her mom er her dad ended up dying from some type of disease. (T 2, 45T)
5. 戦争情報	死傷者数，被害状況，戦中の生活など，戦争に関する言及である。 Their main effect was the radiation and just the heat blast sometimes the rubble and stuff. (T 5, 76T)
6. 証言者の情報	証言者の年齢や話し方など，証言者自身に関する言及である。 Uum she was like really old lady incredibly polite. (T 1, 2 T)
7. 証言の内容	被爆証言でどのようなことが話されたのかに関する言及である。 I mean um she told us about her personal experience I guess. (T 4, 8 T)
8. 参加者の主観情報	TやRによる被爆証言の内容に対する意見や感想などの言及である。 So yeah of course it's wrong like we think about it now it was wrong of those people to judge her like that like just not. (T 1, 114T)
9. 平和学習	Tの参加した平和学習に関する言及である。 Okay uuum basically on the peace studies trip that you go to uuum you talk to a survivor of the atomic bomb from Hiroshima. (T 4, 1 T)
10. 現在の広島	広島の様子など，現在の広島に関する言及である。 The the city yeah actually it was really gorgeous. (T 2, 81S)
11. 今回の会話	伝達の会話自体に関する言及である。 I dunno like a lot of the details about the day for I kinda forget because it was so long ago. (T 1, 49T)
12. 関連話題	他の戦争についてなど，被爆証言以外の内容に関する言及である。 Have you seen Grave of the fireflies? (T 6, 51R)

表3は，会話データ（T1～T6）別に，12の話題のカテゴリー（話題1～12）の発話文数（上段）とその百分率（下段）を集計した結果である。なお，本分析ではTの発話を対象としている。百分率は，各データのTの全発話文を分母に計算している。表中，発話文の割合が

10%以上の項目はハイライト，過半数の割合の項目は太枠で示している。

表3 発話文の話題のカテゴリー別の分類結果

伝え手	T 1	T 2	T 3	T 4	T 5	T 6
話題 1	15	31	40	16	43	38
体験（当日）	6.6%	34.1%	16.6%	8.3%	11.2%	12.5%
話題 2	25	21	15	26	19	31
体験（後日）	11.1%	23.1%	6.2%	13.5%	5.0%	10.2%
話題 3	22	7	3	7	0	10
当日情報	9.7%	7.7%	1.2%	3.6%	0.0%	3.3%
話題 4	0	4	4	0	0	2
後日情報	0.0%	4.4%	1.7%	0.0%	0.0%	0.7%
話題 5	3	1	8	0	0	33
戦争情報	1.3%	1.1%	3.3%	0.0%	0.0%	10.8%
話題 6	43	3	2	9	3	30
証言者の情報	19.0%	3.3%	0.8%	4.7%	0.8%	9.8%
話題 7	11	0	5	27	6	7
証言の内容	4.9%	0.0%	2.1%	14.0%	1.6%	2.3%
話題 8	46	7	143	57	18	29
主観情報	20.4%	7.7%	59.3%	29.5%	4.7%	9.5%
話題 9	4	0	3	31	0	32
平和学習	1.8%	0.0%	1.2%	16.1%	0.0%	10.5%
話題 10	0	12	14	2	0	0
現在の広島	0.0%	13.2%	5.8%	1.0%	0.0%	0.0%
話題 11	20	5	4	18	30	0
今回の会話	8.8%	5.5%	1.7%	9.3%	7.8%	0.0%
話題 12	37	0	0	0	264	93
関連話題	16.4%	0.0%	0.0%	0.0%	68.9%	30.5%
合計	226	91	241	193	383	305
	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表3より，伝達場面の会話で言及された話題の特徴を2点指摘する。  
1点目に，全体としては，「1. 証言者の体験情報（当日）」「2. 証言者の体験情報（後日）」の言及が多く，これに続いて「8. 参加者の主観情報」に言及する傾向がある。話題1と話題2は6会話中4つの会話で10%

以上の言及である（話題1：T2, T3, T5, T6, 話題2：T1, T2, T4, T6）。話題8は、6会話中3つの会話で10%以上の言及で（T1, T3, T4）、T3は59.3%と高い割合である。「12. 関連話題」も同様に、3つの会話において10%以上で（T1, T5, T6）、T5は特に高い割合である（68.9%）。ただし、話題8は、他の会話も10%以下であっても言及があるのに対し、話題12の他の会話は0%となっている点で異なる。以上より、伝達場面の会話では、比較的言及される傾向にある話題（話題1, 2, 8）があり、これは、被爆証言の事実関係に言及し（話題1, 2）、それに対する参加者の解釈を述べ（話題8）、証言に対する意味づけを行っていると考えられる。

2点目に、特定の話題に集中的に言及する会話（T3, T5）と、複数の話題に言及する会話（T1, T2, T4, T6）があるといえる。T3は「8. 主観情報」（143 発話, 59.3%）、T5は「12. 関連話題」（264 発話, 68.9%）の値が特に高い。4.1 節において、アンケート調査では、質問項目全体に端的に回答しており、証言内容は全体的に理解していたと考えられると述べた。一方、伝達場面の会話では、証言内容全体に言及することは殆どなく、言及する話題中の発話文数にも大きな差がある。参加者は関心のある話題に言及し、その言及のありかたも会話により異なるといえる。以下、2つの特徴について会話例をあげて検討する。

例（2）は、「8. 参加者の主観情報」の言及が過半数を超えるT3（143, 59.3%）の会話例である（特徴2）。また、「1. 証言者の当日の体験情報（当日）」に継続して「8. 参加者の主観情報」に言及している（特徴1）。まず、Tが当日の川の描写について言及し（49-51）、52でRが「horrifying」と評価を述べる。これに対し、Tは、同様の評価と、現地ですぐに見たことと証言内容を関連付けて言及する（54-57）。つまり、被爆証言の事実関係に言及し、その事実関係に対する解釈をRの発話を契機としてTが詳細に述べることにより、話題8の値も高くなっていると考えられる。なお、この川の情報からRが川の大きさを質問し

(58-59), 「10. 現在の広島」へ話題が展開する。

例(2) 当日の体験情報→参加者の主観情報 (T3)

49	T	And um so they went down to the river.
50	T	And she just kinda explained the river as being just like there's hundreds of people around and you know, obviously a lot of them are dead.
51	T	And it's like just like the river is full of blood and which is really.
52	R	That's horrifying.
53	T	It is horrifying.
54	T	And its its its even more horrifying because when your there.
55	T	And you see the river now looks really peaceful and you know blue years ago or so? like that happened it was just like.
56	T	And and you stand by it and you just kinda think about wow not even like what 70.
57	T	It just flabbergasts me still I can't.
58	R	I have a question.
59	R	How big was the river?

例(3)は、「12. 関連話題」の言及が過半数を超える T5 (264, 68.9%) の会話例である (特徴2)。Tは、前の話題が終了した時点で、Rに対して質問の有無を確認する (178)。これに対し、Rがこれまで話し合った戦争や原爆の問題について言及する (182)。さらに、Rの参加した沖縄研修に言及し (184)、欧米主義の教育の批判 (185-186) をTと行う。つまり、Rの保有する情報 (表1) やTとRの関心により、元の被爆証言にはない話題へ言及して話題が展開している。この結果、「12. 関連話題」が高い値になったといえる (表2)。

特定の話題に対する言及が多いという点で T3 と T5 は似ているが、その特定の言及内容には違いがある (例(2)(3))。また、欧米主義の教育の批判に関する話題は、おそらく、日本人による伝達の会話であれば、出現しないのではないかと予測される。今後、言及内容の違いを比較する可能性が考えられる。

## 例(3) 関連話題 (T5)

178	T	Anything else?
179	T	I really can't think of anything.
180	R	Um, I'm trying to think of any other questions.
181	T	Uhm.
182	R	I think part of the problem is that most I know of World War Two outside of what we had discussed about the actual- the bombing.
183	T	Uhm.
184	R	In that instance we didn't really expand beyond that- is more related to Okinawa.
185	R	Because American schools talk about America and England and German and nothing else.
186	T	Yay Eurocentricism.

次に、例(4)は、複数の話題に言及しているT6の会話である(特徴1)。また、T5ほどではないものの、「12. 関連話題」の値も大きい(93発話, 30.5%)。T6は、アンケート調査で当日の証言者について「On the day of, she was supposed to be making fire lanes, I think.」と建物疎開に関することに言及している。伝達の会話では、まず、当日について友人と一緒に建物疎開の作業中であったことに言及するが、その詳細については曖昧となる(46-48)。そして、TとRが日本の木造家屋の特徴や焼失について、関連授業での学習をもとに言及する(49-50)。そこで、Rが映画「火垂るの墓」を例にあげ、空襲とその映画に関する話題となる(51-58)。つまり、RとTが証言者の当日に関する情報を確認することで、「1. 証言者の体験情報(当日)」から「12. 関連話題」へ話題が展開している。ただし、Rが話題がそれたことに留意したため(59)、Tが再び話題1に戻って言及することとなる(61)。

Rは、次の平和学習に参加予定であり(表1)、被爆証言や戦争に関する情報量も多く、関心も高いことが、「12. 関連話題」への展開に影響していると考えられる。例(4)は、話題1から話題12への展開の例であるが、他の会話も、比較的言及の多い話題1や2(特徴1)から別の話

題へ展開することで、複数の話題への言及が増加したものと考えられる。ただし、この話題の展開については、さらに集計を行って検討する必要がある。

例(4) 関連話題 (T6)

46	T	I remember that she was with her- I believe it was with her friend.
47	T	And I think they were like- I don't know if it was a school or something like that but she was talking about how- uh- it was either school or some type of program they were in to help dig out uh- fire bomb shelters or something like that?
48	T	They were supposed to clear something for fire.
49	R	Mmm yeah 'cause that's what that happened a lot like the houses in Japan were so old like flames would just drop flaming sticks.
50	T	Yeah th-the-they'd bomb- um- I'm in a peace and studies class based on the atomic bomb and we've talked about that th they've just fire bombed everything.
51	R	Have you seen Grave of the fireflies?
52	T	I have not.
53	R	Oh my gosh I have it is it's incredibly sad.
54	T	Is it based on Hiroshima?
55	R	It's based on the fire bombings of Kobe.
56	T	Oh okay but I wanna see we never learned about the fire bomb stuff.
57	R	Right its it's a Ghibli movie like.
58	R	It's no Miyazaki- like but I could not believe like Princess Mononoke was dark but, Grave of the Fireflies just really breaks your heart-
59	R	But I'm sorry! Off topic!
60	R	Oh! It's okay- it's like relevant so.
61	R	But uuum- I remember like- of course the whole bright white light when it first drops.

## 5. 考 察

アンケート調査と伝達の会話の2つの追跡調査から明らかになった特徴を2点指摘する。1点目に、アンケート調査では質問に対する端的な

回答であるのに対し、伝達場面の会話では言及する話題の内容が参加者の関心によって詳細化・多様化する点が指摘できる。アンケートは質問項目に対して端的に回答することが期待されるのに対し、伝達場面の会話では言及内容に制限はない。よって、「12. 関連話題」で被爆証言には出現しない話題にも言及することもあった（例（3）（4））。また、単に言及される話題の内容が詳細化・多様化するのではなく、原爆投下に関与する事実関係に言及したうえで意見を述べるなど（例（1）（2））、言及する話題にある程度の傾向があることも観察される。

さらに、言及のしかたには2つの特徴が指摘できる。すなわち、特定の話題に特に言及する会話と、複数の話題に言及する会話である（表3）。本調査の伝達の会話では、被爆証言の全てに言及する必要はなく、参加者がそれぞれの関心により、言及する話題を選択して話しているといえる。この言及する話題の頻度の違い、展開のパターンなどに関しては、今後、日本人による伝達の会話と比較することで、接触場面の特徴かどうかを検討する可能性がある。

2点目に、1点目の言及する話題の内容の詳細化・多様化には、TだけでなくRの発話も影響しており（例（2）（3）（4））、Rの役割の大きさが指摘できる。言及内容には、参加者の話題に対する情報量と関心（表1）が影響していると考えられる。本調査のように、内容に統制を加えない会話では、参加者が主体的に会話を構成することとなる。例（4）で、Rは話題が展開したことを留意したが、会話を録画していなければ、そのまま「火垂るの墓」について話した可能性もある。実際の日常生活の会話では、さらに被爆証言とは異なる話題へ展開することも予測される。今後、次年度に平和学習に参加予定の学生を受け手にするなど、受け手の情報量を統制して言及する話題を検討する可能性が考えられる。

## 6. 結論と今後の課題

本研究では、被爆証言を聴講した米国人学生に対し、2つの追跡調査を行い、アンケート調査から被爆証言を全体的に理解していることを確認し、伝達場面の会話調査から被爆証言で言及された話題の何をどのように伝達しているかという特徴を探った。後者の伝達場面の会話調査からは、12の話題の分類をもとに2つの特徴を指摘した。すなわち、事実関係に言及したうえで参加者の解釈を述べることで被爆証言の意味づけを行う傾向にあること、特定の話題に集中する会話と複数の話題に言及する会話があることである。会話の参加者の被爆証言に対する関心や情報量によって言及する話題の内容が詳細化・多様化し、元の被爆証言とは異なる話題も話されている実態も明らかとなった。

本分析では、伝達の会話の現象の記述にとどまったが、今後は、被爆証言を国の友人に伝達して語りを再構築することで何が起きるのか、そこにどのような意味づけがあるのかについて、さらに分析を行う必要がある。これは伝達の会話の目的にも関わる課題であり、調査のありかたについても検討する必要があると考える。

### 文字化の規則

.	発話文の終了
?	質問文の終了
-	先行語の引延し

### 謝 辞

被爆証言の収録にご承諾くださった証言者のみなさま、追跡調査に協力してくれた米国人学生の方々に、心より感謝申し上げます。本研究は、平成23-25年度科学研究費助成事業（若手研究（B））「被爆者の英語による証言の理解と伝達の追跡調査－情報の解釈と変化の分析－」（課題番号：23720301、研究代表：大場美和子）の研究成果の一部です。



## 参考文献

- 烏日哲（2010）「中国人日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける説明と描写について—「絵本との一致度」の観点から—」『日本語教育』145 日本語教育学会 pp. 1-11.
- 白石知代（1999）「日本語記事文の読解における再話の効果—再話プロトコルの観察を通して—」『日本語教育』101 日本語教育学会 pp. 11-20.
- 西川玲子（2005）「日常会話に起こるナラティブの協働形成—理解構築活動としてのナラティブ—」『社会言語科学』7-2 社会言語科学会 pp. 25-38.
- 渡辺文生（2003）『日本語学習者と母語話者の語りの談話における指示的表現し方についての研究』平成 13—14 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
- 渡辺文生（2007）『日本語学習者と母語話者の語りの談話における「話段」についての研究』平成 16—18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
- 渡辺由美（1998）「物語文の読解過程—母語による再生と読解意中のメモを通して—」『日本語教育』97 日本語教育学会 pp. 25-36.
- Glaser, B. G. and Strauss, A. L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine Publishing Company.
- Ochs, E., Taylor, C., Rudolph, D. and Smith, R. (1972). Storytelling as a Theory-Building Activity. *Discourse Processes*, 15, 37-72.